

ほらっちくん



社会福祉法人
長野県社会福祉協議会

教えて！原田先生

福祉教育について一緒に考えました

平成28年1月に「福祉教育推進フォーラム」が開催され、長野県内各地から社協職員が集まり、「原点回帰」をテーマに「社協がおこなう福祉教育」について考えを深めました。

日本福祉大学の原田正樹氏を講師に招き、講演と質疑応答を交え、福祉教育の目的、社協と学校との関係づくり、学習プログラムの企画など、これからの取り組みのヒントを解説していただきました。

一問一答 Q&A

福祉教育についての
素朴な疑問に答えます



日本福祉大学 教授
原田正樹 氏

もくじ

3 何のために、どうして、福祉教育が必要なの？

5 福祉教育で何が変わるの？

6 大人への福祉教育も必要なのでは？

質のいい福祉教育とは？

7 先生に話を聞いてもらえないんです

先生からの依頼がいつも突然で
対応に困ってしまいます

8 学校と社協とのおつきあいは
どうればいいですか？

9 「教育福祉」とは？

体験型プログラムの目指すところとは？

10 負の印象で終わらせない
プログラムにしたい！



プロフィール

長野県出身。日本福祉大学教授。日本福祉教育・ボランティア学習学会理事。全国社会福祉協議会ボランティア・市民活動振興センター運営委員、『月刊福祉』編集委員、「広がれボランティアの輪」全国連絡会副会長などを務める。茅野市、氷見市、伊賀市、半田市など全国各地の地域福祉実践にかかわる。



12 福祉を「自分事」としてとらえるためのヒント
こんな実践をしています！

13 福祉教育プログラムを企画しよう

14 山岸母さんのアイスブレイク講座

16 事例紹介●県内各校の活動より

*2P～15Pは福祉教育推進フォーラムでの講演・議論をもとに構成しました。
文責・長野県社会福祉協議会

Q. 何のために、どうして福祉教育が必要なの？

A.

社協が福祉教育を実践したからといって、すぐにボランティアが増えたり、お金を稼げるわけではなく、収益が上がるわけではありません。福祉教育は何のためにやるのでしょうか。

福祉教育をしっかりと行っている地域と、行っていない地域とでは、住民の福祉意識がまったく違います。福祉教育が広まると、地域福祉の成熟度が変わってくるのです。「共生の文化」をつくるのが福祉教育の目標であるということ、社協の全体で共有しておくことが大切だと思います。

小学5、6年生に「福祉って何だと思いますか？」と聞くと、障害者や高齢者のことと捉えている子がとても多くいます。一言でいえば、社会的な弱者をイメージします。

福祉というのは、^{ひとごと}他人事になりがちです。「私は障害がなくてよかった。あの人たちは特別な人たちなんだ」と、関係性を断ち切ってしまったら、そこで終わってしまいます。そうではなく、福祉を自分のこととして考えてほしい。そんな思いから「ふくし＝ふだんのくらしのしあわせ」というフレーズができました。

福祉教育の根っこ



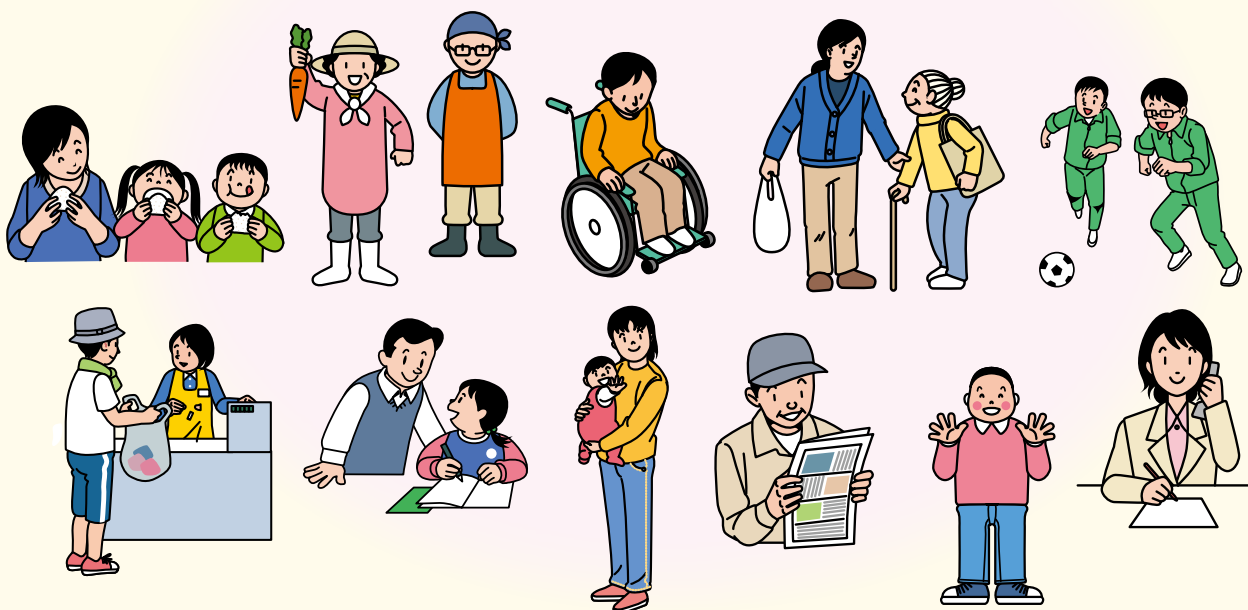
「福祉は障害者・高齢者・困った人のためのもので、できれば福祉に関わりたくない。福祉なんて自分には関係ない」と思っている人たちに、人が生きていくプロセスの中で、「ふだんのくらしのしあわせ」をみんなで作っていくことがこれからの福祉ということをしかりと伝えていく必要があります。

「ふだんのくらしのしあわせ」の主人公は「私自身」です。いろんな人と関わりながら、助けってもらったり、助けたりしながら生きていく。福祉は特別な人のものではなく、「私自身」にとっても大切なことなんだということを伝えることが重要です。これが福祉教育の根っこ（土台）となります。

「ふだんのくらしのしあわせ」をどのように地域で実現していけばいいのかを、他人のための福祉（他人事）ではなく、自分たちのための福祉（自分事）として住民全体で考えていく。住民主体で考えていく。そのための「福祉観」をつくっていくのが、福祉教育なんです。

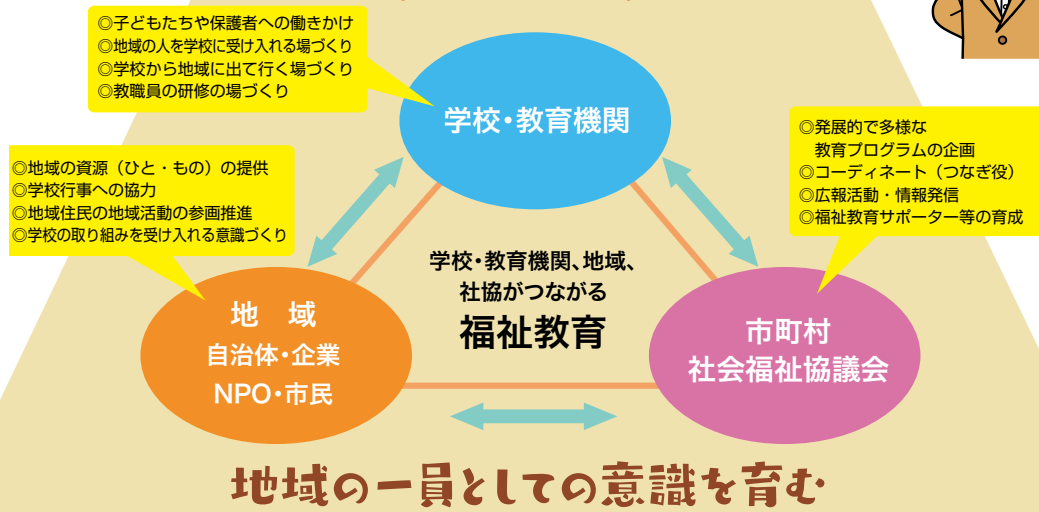
ふくし（福祉）は

ふだんのくらしのしあわせ



福祉教育は地域福祉の土台です

「ふだんのくらしのしあわせ」を
他人事でなく自分事にする



「福祉観」という価値をつくるのが 福祉教育

地域というのは、2つの顔を持っていると言われています。

1つは、どんな相手も受け入れてくれる優しい顔。もう1つは、排除したり抑圧したり、あるいは差別や偏見などの冷たい顔です。どこの地域にも2つの顔があって、優しい顔が強くと出ると、誰もが住みやすい地域になります。しかし逆の場合もたくさんあります。

放っておくと、冷たい顔の方がどんどん大きくなってしまふのが地域というものです。でも「人間ってそんなもんじゃないよね。お互いに支え合うことが大切だね」ということを、福祉に無関心・批判的であったり、誤解をしてい

る人たちに、「福祉観」を伝えていく必要があります。そして一生懸命耕された地域では、「一緒にやろうか」「できることは手を貸すよ」という声が出はじめ、ボランティアも増えてきます。

成果が見えにくいのですが、その「福祉観」をどうつくっていくかが大切です。

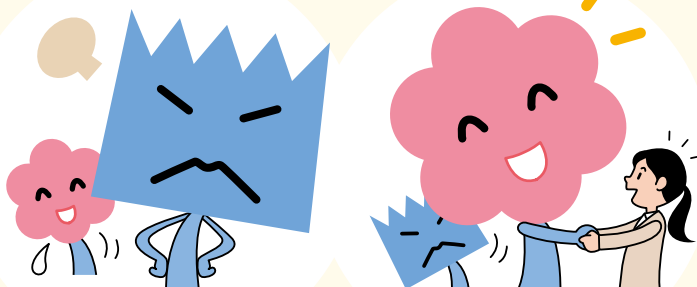
社協はぶれない軸を持って

「住民の福祉意識」は総論賛成・各論反対と、よく言われます。会議の場など大勢が集まっている所では理解を示しているけれど、実際に隣の家で精神障害のある人が引っ越して来るとなると、よい顔をしなかったり、隣の家が認知症の一人暮らしの世帯になると、「施設に入れればいい」と、排除することがあります。

総論ではなく各論をどうするか。これが、これからの「福祉観」をつくっていく大事なところなんです。

冷たい顔を持つ人たちの中には声が大きかったり、権力を持っていたり、別の力を持っていたりする人もいます。それには、関係者が、「共に生きることを大事にするんだ」という軸をしっかりと持って福祉教育に取り組まなくてはなりません。そうすることが、その後の住民主体の地域づくりにつながってくるのです。

地域の2つの顔



ほっておくと冷たい顔が
大きくなる

社協が頑張って
優しい顔を育もう!

Q. 福祉教育で何が変わるの？



A. 長年福祉教育を実践してきた先生方のお話です。

福祉教育で変わる3つの変化

1 「子どもが変わる」

理屈はわからないけれど福祉教育をやると子どもたちが一回り大きくなる。この事を体験的につかんだ先生は、この教育実践にはなにかあると確信を持っていたそうです。

2 「私自身が変わる」

「共に生きる」という言葉があります。「障害がある人もない人も同じ人間なんだよ」と子どもたちに伝え、「じゃあ先生は重度の障害者と共に生きることができるの？」と、無言の眼差しで訴えかけてくることがあるそうです。中学生になるとその大人が口先だけで言っているのか本気で言っているのか、ちゃんとわかります。

大人は口先だけで「共に生きる」ときれいごとを言いますが、その結果、福祉は偽善だとか建前だとかそういう印象を受ける子どもたちもたくさんいます。ある先生は、「道德教育」は人としてどうあるべきかという「規範を教える教育」であり、「福祉教育」は「価値をつくる教育だ」と言っています。

つまり、「共に生きる」ことが大事だなんてことは子どもたちも分かっているわけです。し

かし、生活の中で重度の障害のある人と生きていくのは、そんなきれいごとではありません。そこをどう伝えていくか。それを伝えようと思えばするほど、先生自身の「福祉観」が子どもたちにえぐられるのです。

福祉教育を30年以上実践してきた先生は、「子どもたちによって福祉観を変えられた」「私自身が変わった」と言っています。また、別の先生は、「福祉教育は、大人の後ろ姿を見せることなんだ。福祉とはなにかということ子どもたちに説明するのではない。大人の後ろ姿を見せることが、子どもたちに福祉をわかてもらうことになるのです。

福祉は、まさに価値の話です。それをどう子どもたちに伝えていくか。伝える側の「福祉観」や「実践観」がなにより問われてきます。

3 「周りが変わる」

教師は、生徒の変容や成長に非常に敏感に気づくものです。福祉教育を実践しているクラスは生徒がまとまり、生徒が成長している。すると、「福祉やボランティアというのには何かありそうだ」と気がついた他の教師が関心をもち、自分たちができることを探し始める。

やがて賛同する教師がたくさん出てきて、学級から学年へと広がっていく。そして、福祉教育やボランティアを受験勉強のさまたげと考えていた保護者自身も、子どもの変化を見て変わってくるのです。

Q. 大人への福祉教育も必要なのでは？

A. 高齢者が子どものためにというだけではなく、「子どもの頃、地域のおじいちゃんおばあちゃん、おじさんおばさんにお世話になった」という原風景を今、作っておく。子どもへの福祉教育は、成人になったときに地域のことを考えてもらうための種まきでもあります。

親子の福祉体験をもっと企画しよう



地域福祉を考えていく時に、大人が子どもに一所懸命に関わるというのは、その子たちが大人になる20年後30年後の地域づくりをしているという発想で、福祉教育や子どもの支援をしていくことも大切です。

また、親子で一緒に福祉学習をすることはすごく大切です。例えば授業参観で、福祉教育の授業を行い、保護者の方にも一緒に参加してもらうという方法もあります。

社協がやるのであれば、親子の体験教育とか親子の福祉教室を企画して、子どもと一緒に参加してもらうというのは、とても良いと思います。たぶん今の20代、30代を含めた若い人は「福祉観」がはっきりしていないので、その世代に向けた福祉教育もこれからの必要な視点です。

Q. 質のいい福祉教育とは？

A. 2002年に総合的な学習の時間が始まり、福祉が学校の指導要領に位置づけられました。その結果、先生側にやりたい思いはなくても、福祉教育をやらなければならなくなりました。福祉教育の形骸化の原因は、ここにあります。

しかし、より良くしていこうという仕組みづくりの議論はなされています。テーマは「協同実践」です。学校任せの福祉教育ではなく、「福祉のプロ」と「教育のプロ」が一緒になって質のいい福祉教育をしていく。そのために学校の先生・社協・地域の三者で共存していく方法を探する必要があります。

社協の弱点とは

社協側の弱いところは、小学3年生にも6年生にも中学生にも同じように話をしてしまうことです。例えば、「ノーマライゼーション」という難しい言葉をどうわかりやすく伝えるかといったときに、それぞれの学年に応じて翻訳してくれるのが、学校の先生です。

社協としては、地域の課題など、子どもたち

に伝えたいことを整理し、プログラムを提案することが求められます。餅は餅屋で、互いにプロとしての腕の見せ所だと思います。

そこにはちゃんと福祉教育のメッセージがあり、そのための方法論があり、その度にどうしたらいいだろうかということを社協から学校の先生に提案しながら一緒に授業をつくっていく。これが「協同実践」という方法です。「協同実践」ができると、先生の負担が少なくなるだけではなく、質のいい福祉教育ができます。

福祉教育はプロ同士の 強カタッグで！



Q. 先生に話を聞いてもらえないんです

A. 社協職員の中には「福祉を理解していない先生が多い」と批判する方もいますが、学校の先生からすれば福祉だけを教えるわけではありません。それを、先生たちに福祉を理解してから福祉をやってくれなんて言ったら先生たちに嫌がられてしまうのも当然です。

学校の教科書は持っていますか？

皆さんの社協は、小、中学校で使っている教科書は全部持っていますか。あるいは、教育委員会で策定している教育振興計画を見えていますか。また、お付き合いする学校はどんな教育目標を掲げ、どんな教育計画を立てているのか知っていますか。そこまでちゃんと読み込んで先生方と話ができていますか。

学校のことを知らずして思いを伝えようとしても、伝わりません。

福祉教育を熱心に行っている市町村社協の中には、小学校1年生から中学校3年生の教科書を1セット、その教育委員会から譲ってもらい社協に置いています。何年生のどこの教科単元に福祉的な教材があるかということを把握しています。

先生方からすると教科教育の軸に福祉が上手くつながれば、すぐにでも興味を示してくれます。先生方がやりやすい教育計画に「福祉が乗って運営しますよ」となれば、興味をもって話を聞いてくれるでしょう。「ああ、この社協職員は教育現場のこと、学校のことをわかってきている」と、先生たちはきっと話を聞いてくださるはずです。

Q. 先生からの依頼がいつも突然で対応に困ってしまいます

A. 「福祉の学習をしたい」と学校から突然社協に依頼が来て困ってしまうというのは、社協がどんな仕事のスケジュールでどんな動きをしている組織なのかを学校の先生は知らないからです。

社協が学校の教育計画を知ることが前提ですが、先生へどのように福祉教育を進めていけば良いのか、社協のことを理解してもらわなければなりません。

ばなりません。

そこで、お互いを知るために、できれば学校や教育委員会と社協とで、年に1回でもいいから話し合う場や研修の場をつくる必要があります。研修会を開くときのコツは、先生に学校の現状を教えていただき、社協は福祉のことを先生に伝えるといった研修プログラムにして、交互に講師を変えていくことです。

「障害」の表記について

最近は、障害のことを「障がい」と表記されることもあります。福祉の世界では「知的障害」や「認知症」など本人や家族の求めにより表現を変えてきたものもあります。しかしながら「障がい」という表記の仕方は当事者による運動というよりも、行政主導で進められてきた背景があります。

そもそも「害」という言葉がおかしいなら、「障」という言葉はなぜ平仮名にしないのでしょうか。むしろ「しょうがい」にした方が、筋が通ります。ICF（10P参照）という考え方では、障害の要因は環境や社会にある、つまり生活のしづらさは、本人の疾病や機能といったその人の問題ではなく、むしろ社会にあるという「社会モデル」の立

場を重視します。その立場からすれば、「障害を被っている人」という捉え方をします。

ところが何も考えずに、なんとなく私は差別していない、きちんと理解しているという風を装い、まさに偽善的に「障がい」を使う人たちが増えてきました。これは逆差別ともいえます。

当事者の求めているのは、障害者と健常者という人間を2つに区分することをなくしてほしいという切なる要求であって、「障がい」と表記してほしいなどということではないのです。福祉教育の関係者は、まずそのことから猛省する必要があるのではないのでしょうか。（原田）

ちょっと一言...



Q. 学校と社協とのつきあいはどうすればいいですか？

A. 社協職員にとって学校の先生とのつきあいは、多職種連携と一緒に。学校や教育の現場のことを社協側がしっかりと理解して共通言語で話せるかどうかにかかっています。

学校の教育計画とのすりあわせを

小学校の校長室に行くとその学校の教育目標が必ず掲げられています。そこには、どんな大人に育ててほしいかという願いが込められていて、「優しい子」とか「思いやりのある子」とかという福祉的な人間像が入っています。

そうすると、福祉教育を進めるときに、教育目標と福祉教育が重なると説明する。それが分かるだけで、先生は興味を持ってくれます。

教育には教育の文化があって土俵があります。先生に福祉の土俵に上ってくださいというのではなく、社協側が学校や教育の土俵に上って、そこで一緒に話ができる努力をすることが先決です。

いずれ、学校の先生も社協や福祉のことを理解してくれて、熱心な先生ならこちらの土俵にも来てくれるようになります。まずはこちら側が相手の土俵に入るための努力をどれだけするか重要です。

地域の窓口は教頭（副校長）先生

皆さんの社協は、3月、4月の異動があるとき、地域の学校にご挨拶に行っていますか？

熱心な社協の職員は、校長先生と教頭（副校長）先生の人事情報を把握し、お世話になった校長先生が異動するとなったら一番最初に挨拶に行きます。また、新しい教頭（副校長）先生が赴任してきたら一番最初に名刺を渡して、社協を理解していただくつながりを作っています。大概、教頭先生、または副校長先生がその地域の窓口になります。

そういうことを日頃から丁寧におこなわないで、「学校の理解がない」とか「先生たちは無理解だ」と言っても、それではなかなか上手くいきません。これは医療や法律家と連携するときと同じ話です。多職種連携を考えて学校とつながりをつくと良いのではないかと思います。

まずは
相手の土俵の
上へ！



3月、4月はごあいさつの季節です



Q. 「教育福祉」とは？

A. 「教育福祉」という分野があります。近年問題になっている子どもの貧困などは教育福祉の分野になります。社協が学校へ行って「福祉教育をやってください」と言うだけでなく、子どもたちの貧困、生活課題など学校の中にある教育福祉の問題を視野にいて学校と関わっていくことが、これからのテーマです。

子どもたちの課題を社協がキャッチするというスクールソーシャルワーカー的な視点で関わることで、新しいステージに展開できます。

福祉教育と教育福祉によって、地域でどう子どもを支えていくか、これからの学校と社協の関係づくりにかかっています。

**社協が学校に行くときは
スクールソーシャルワーカー的な視点で
子どもたちの課題をキャッチしよう！**



Q. 体験型プログラムの目指すところは？

A. 体験型プログラムの目的がどこにあるのか、明らかにする必要があります。例えば、介護技術を身につけるという目的であれば、疑似体験でも十分です。大学生や専門学校の学生など社会福祉士や介護福祉士のような専門職を目指す人にとって、疑似体験はすごく大事です。介護される人の気持ちが分からないと、よい支援につなげることができず、体験を通して学ぶことで、専門職の学びを深めることにつながります。

では、小中学生に介護技術を教えることが福祉教育の目的かといえば、そうではありません。

伝えたいのは介護技術ではなくて、「人が生きるってどんなこと？」「障害ってなあに？」「老いるってどんなこと？」といったその種まきをすることです。

疑似体験をするのであれば、目的をはっきりさせて、それに合った方法を考えていくことが基本です。その視点の気づきを沢山見つけられるプログラムを行うことで、福祉を自分のこととして考えられるようになります。

連続したプログラムの一つとして

少なくとも3～4回は連続して行うのがいいでしょう。初回の体験では気づきやどういう意味があったかを考え、2回目は、当事者の方に話を聞かせてもらうといった連続したプログラムの中の一つに疑似体験を組み込んでください。車椅子やアイマスクなど、一回の疑似体験では、「怖かった」「大変だった」と負の印象だけで終わってしまいやすく、むしろ疑似体験はやらない方がいいと思います。



Q. 負の印象で終わらせない プログラムにしたい！



A. 最近ではICF（国際生活機能分類）の考え方が医療・福祉など様々な分野に広がってきています。福祉教育の学習プログラムにもぜひICFの視点を取り入れてみたらいかがでしょうか。ICFは生活機能に着目しようという考え方で、障害があるかないかではなく、その人の「できること」と「できないこ

と」は何なのかを考えます。

一番大事なのは、「ストレングス（strength）＝強み」です。その人の強みやできること、得意なことにもっと可能性を広げていけば、相対的にその人の人生の質を良くしていけます。そして、強みを大事にする視点は、個別援助だけでなく、地域援助にもあてはまります。

ICFの視点を取り入れた福祉教育の事例

全盲の女性との交流

アイマスクなどの疑似体験をして、目が見えなくて大変なんだ、目が見える僕たちはどうしようかと考えさせて終わったとしたら、子どもたちにとっての視覚障害は、マイナスの部分だけで終わってしまいます。

そこで、全盲の方との交流で、目の前でリンゴの皮をむいてもらう。すると、子どもたちは「目が見えないのにナイフを持って大丈夫なの」と心配しながら注目します。ところが彼女がくるくるとむき始めたときに、「うわあすごい」「僕より上手だ」と、歓声があがり、むき終わるころには、「僕のお母さんと同じだ」とい

う声ができます。リンゴの皮をむくわずか数分の中で、子どもたちはその人の生活に深く興味を持つようになります。

そのあと、彼女の家での様子や、補助具の紹介、買い物の場面といった日々の生活の様子を紹介してもらいます。すると、「目が見えないけどこんなにできることがある」ということが見えてきます。質問タイムでは「こんなときはどうするの」「あんなときはどうするの」と素朴な疑問が飛び交います。

そして最後に彼女はこんな話をしてくれました。

「でもね、おばさんは、初めて行くところ、知らないところだと怖くて一歩も足を踏み出せないんだ。そんなときにはみんなが声をかけてくれるとほんとにうれしい」。

目が見えなくてもできることはたくさんあります。しかし、そこだけを伝えても障害を伝えたことにはなりません。

「できること」と「できないこと」の両方を丁寧に伝えていくことで、障害に対する捉え方が変わるのです。



認知症の当事者家族の方の話を聞く

認知症サポーター養成講座は、プログラムによって修了生の意向が変わるという結果が最近出ています。医師による医療的な説明や解説の講座だけだと、断片的な病気の理解になり、地域の中で認知症狩りが起こるそうです。「ねえねえ、あの人が怪しくない?」とか、「あの人が当てはまりそうだよ」とか覚えたチェックポイントで一生懸命認知症探しを始めてしまいます。

そこで、当事者講師として若年性認知症になった方もいいのですが、家族の方に話をしていただく。すると、「認知症の介護って家族は

大変だけど、うちのばあちゃんにはこんなかわいらしいところが出てきてね、こんな喜びがあったのよ」など、話を聞くと修了生は認知症をどう受け入れたらいいのか理解につながるといいます。

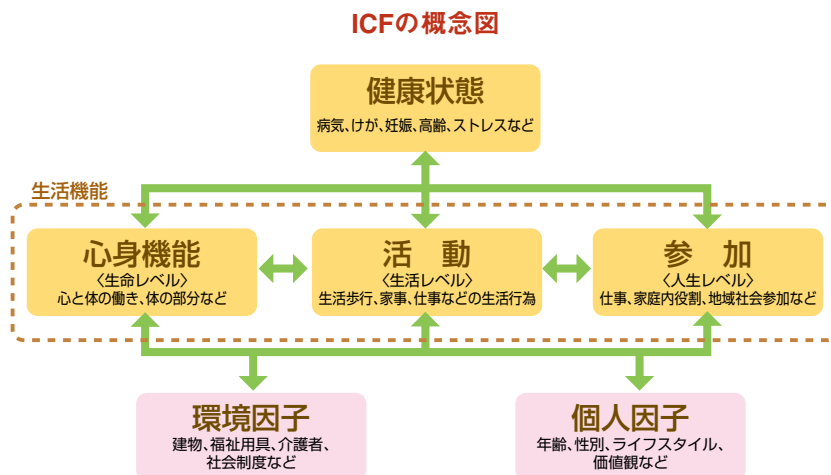
家族や当事者を巻き込めば、人を支えたり人を受け入れたりという発想になってきます。病気を理解するのではなく、その人の生活を理解していく学習プログラムを、丁寧に地域で取り組む必要がある。そういう意味では、子どもだけではなく、大人の福祉教育もとても大事です。

ICFの視点

ICFとは、「人の生活は環境（環境因子）によっても左右され、同じ障害（心身機能・身体構造）であっても、その人の性格や成育歴、価値観（個人因子）によっても、活動や参加の状態が変わる」という考え方です。

そして現在、障害の捉え方から発生したこの考え方は、高齢者や子どもなど、社会で生活する誰に対する福祉を考える場合でも適応できる考え方として重要視されています。

人の健康に関する状況を表すための標準的な概念的・言語的枠組みとして、WHO（世界保健機関）で採択されました。ICFとは、International Classification of Functioning, Disability and Healthの頭文字を取ったもので、「国際生活機能分類」と訳されています。



まちづくりにつながる福祉教育 「ふるさとアルバム探検隊」

長崎県のある離島の社協が、とっても素敵な地域ぐるみの福祉教育をしています。その離島は、人口が少なくなり、限界集落が増え、島全体が元気ありません。そこで社協は何をしたかという「ふるさとアルバム探検隊」という子どもたちのチームを作って、地域の人の情報を集めてムービーを作ろうという取り組みをしました。

夏休みに子どもたちは地域の人の家に行き、昔の頃の写真を、エピソードを必ず聞いた上で、借りてきます。集めた写真は、社協で一本のムービーにします。台本は子どもたちがお年寄りから聞いたエピソードをつなぎ合せて、ひとつの

若い頃が
ね……



この写真には
どんな思い出が
あるの？

やっぱり
いいところだ

物語を作り、できあがったムービーの上映会をします。

上映会に集まったお年寄りや地域の方たちは、映像を観ながらボロボロ泣くんですよ。昭和40年代、まだ島に元気があった様子が映される。懐かしんで泣いているだけではなく、それを観終わった後、「やっぱりこの島ってこんなにいい所だったんじゃないか」「もう一度町を元気にしようよ」という声が、子どもからも大人からも出てくるんですね。

それ以前は、大人が集まってまちのことを協議すると、「人がいなくなって、あれがないこれがない」そんな議論ばかりで、子どもたち自身も、島に劣等感を持っていました。親も「早く島から出ていかなきゃだめだ」と言っていました。それがこの取り組みによって、「やっぱりこの島はいい所だ」「こんないいふるさとなんだ」と前向きな発想をするようになりました。

私は、この取り組みを「地域の回想法」と呼んでいます。まさに、社協ならではの取り組みで、こんな街づくりにつながるような福祉教育も、ICFのストレングス、「強み」を生かした素敵な実践だなあと感じます。

福祉を「自分事」としてとらえるためのヒント

こんな実践をしています！

H27 福祉教育推進フォーラム 事前アンケートより

講師との交流

点字体験の際、当事者からお話しをお聞きし、実際に打った点字を読んでもらう交流をしました。視覚障害がある方にとっての点字とはどういうものなのか、正確に伝えることの大切さなどを感じてもらえました。

点字の体験と一緒に視覚障害者と交流する時間を作り、障害の理解につなげます！

カルタ取り

アイマスクをして歩く体験は子どもたちにとって怖い思いをするだけと考え、視覚障害がある方と一緒にカルタをしたり、楽しみながらできることに目を向ける内容の授業としました。

結果、「かわいそう」という感想よりも「すごい」という感想が多くの子どもから聞かれました。プログラムは校長先生と一緒に考えました。

楽しみながら、自然と「できること」に目が行くようなプログラムを先生と一緒に考えた！

五感を使った物当てゲーム

アイマスク体験で、廊下・階段を歩くだけでなく、嗅覚・触覚・聴覚を使い、物が何かを当てる体験をしました。

目が見えなくても他の感覚を使ってできることがたくさんあることをゲームを通して学べた！

地域の団体を巻き込む

桜並木の長寿化に向けてのプロジェクトに、地元の中学生・住民・ボランティアグループ等を巻き込みました。住民と中学生の接点ができたこと、なんとなく行っていた落葉の清掃活動の意識を生徒自身に考えてもらえるきっかけになりました。

他団体とつながることで、住民と中学生の新たなつながりをつくることができた！

寸劇をとおして知ってもらう

「年をとるとできないことがある」という発想ではなく、「年をとってこそできること」の視点でシナリオを作成し、小学校で発表しました。役者は、地元の高齢者にお願いしました。

地元の方（ご近所さん）に演じていただいたことで、より身近に感じてもらうことができた！

生活の様子を聞く

全盲の方から、家ではほとんどの事を自分で行っているなど、実生活の様子をお聞きすることで、自分と「同じ」部分を感じてもらうことができました。今後、一緒に生活する中でできない部分のみに手を貸してあげられるような体験ができたかと思っています。

実生活の様子を聞くことで、より具体的なイメージが持てた！

インタビューをとおして

障害のある方を講師としてお呼びし、子どもたちがインタビューをしました。（趣味、よくいく所、頑張っている事、など）。その後、交流して感じたことを共有し、人には多面性があること、誰にでも同じ部分と違う部分があることに気づいてもらいました。

インタビュー形式にすることで、講師と子どもの距離が近くなる！



目的を明確に

小学校での車いす体験の打ち合わせの際、担当教諭から「先生も使い方を知らない人が多い」と話があったため、先生を対象にした車いす体験を実施しました。その際、本講座は「思いやりの心を育む」ことを目的としてしていると伝えました。当日、先生方が「どうすれば乗っている人は安心できるか？」と問いかけながら実施していました。

先生と「体験をする目的」を共有し、事前に体験してもらったことにより、社協職員と先生が一緒になって福祉教育を行うことができた！

バスの運転手さんが乗降客に

バスの運転手の方々に、疑似体験セットを装着してもらい、バスの乗降を行いました。掲示物や音声などが思った以上に見えにくく聞こえづらい状況に驚かれていました。車いす用リフトや固定具を実際に使う良い機会にもなりました。

サービス提供者の当事者体験をとおして、誰もが使いやすいサービスのイメージを感じてもらえることができた。

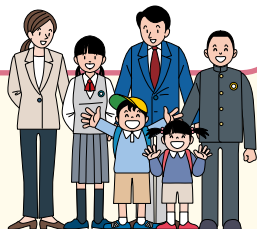


広げよう つなげよう 福祉教育プログラムを企画しよう

高齢・障害体験にとどまることなく、環境問題や多文化共生、人権尊重など、地域の福祉課題や生活課題を身近な暮らしと結びつけて考え、課題解決に実践的に取り組めるように成長していくための福祉教育のプログラムを考えてみましょう。

プログラムづくりにあたって

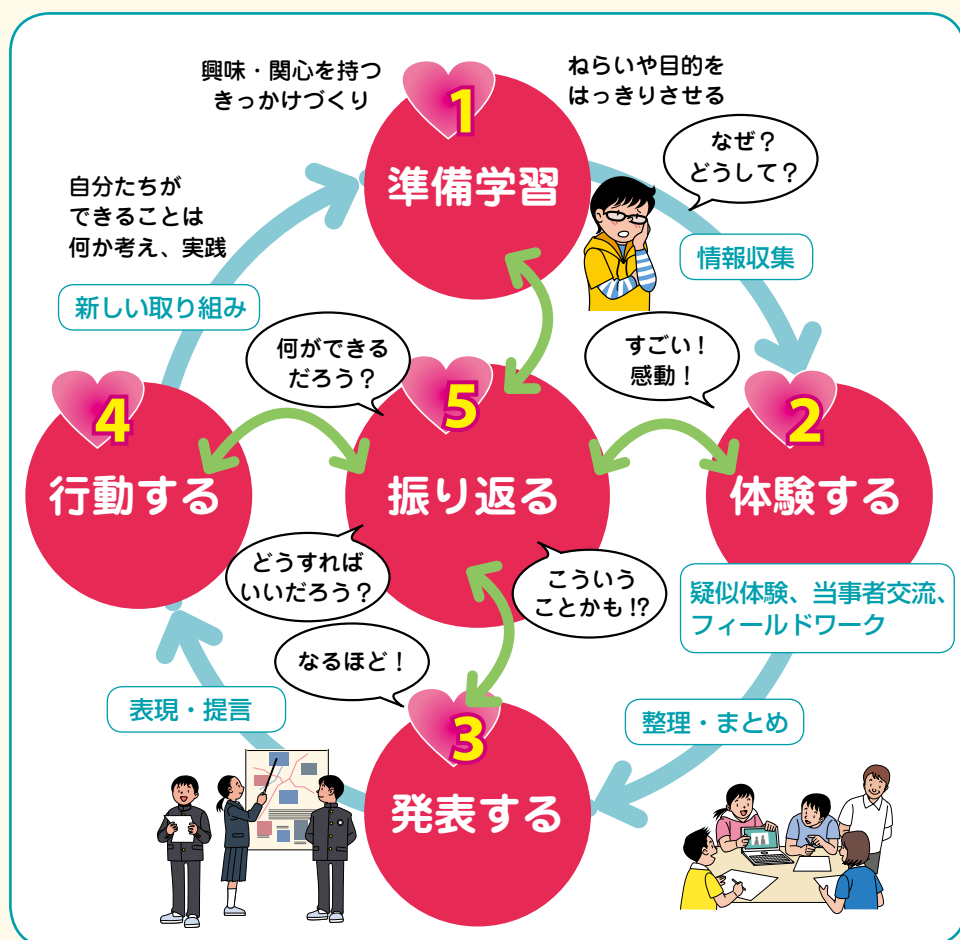
- ①ねらいや目的をはっきりさせましょう
- ②必ず振り返る時間をつくりましょう
- ③相手の都合も考えてプログラムしましょう
- ④学習後、プログラムの評価をしましょう
- ⑤繰り返して行うことが大切です
- ⑥楽しみも忘れずに！



企画のポイント

- ひとこと 他人事でなく、自分自身のこととして考える視点を持てるようにする
- 何ができて、何ができないか、どうすればできるかを考える
- 教えるプロと福祉のプロの協同
お互いの土俵にあがって企画しよう
- 地域の人、保護者、団体組織を巻き込む
- 「福祉教育」の対象は子どもだけじゃない
- 「福祉教育」は地域福祉につながる一歩

福祉学習のプロセス



福祉教育プログラムやいろいろな集まりの導入部にご活用ください。

ていてきにハクする



山岸久美子（安曇野市社会福祉協議会）

今日は
たくさんの方と
知り合えていいね!



-



〇〇さんが言いました
右手を上げましょう!!



右手を下げて
くたむい

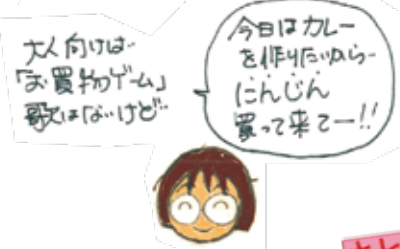
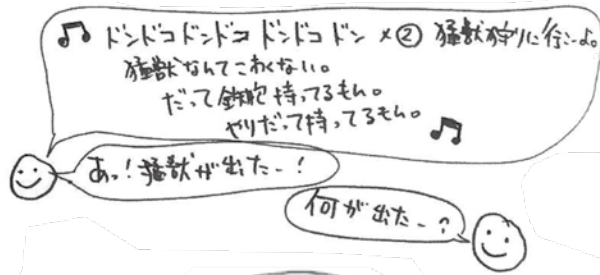


これならまちがえないネ!!



猛獣狩りゲーム

動物の名前の文字数に合わせた人数のグループをつくるゲーム。



あとしどころ

最後はグループにしたい人数の文字数にする

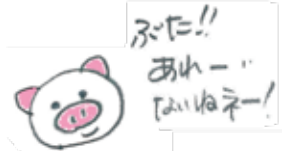
イヌ・ネコ・ウサギゲーム

動物の名前に応じて数を決め、その数だけ拍手するゲーム。



あとしどころ

小学校低学年限定!!
「静かにしなさい!」と
言うかわりに……。



輪ゴム取りゲーム

困った時、なんでもかんでも自分で解決しようとしがちな日本人。 たった一言「助けて」と言えばいいのに。

左手首につけた輪ゴムを右手や口などを 使わずにはずすゲーム。



あとしどころ

困った時「助けて」となかなか言えない。
でも「助けて」と一言いうことで……
“助け合い”が始まる!!

● アンケートの結果から

目の前に
困った人がいたら助ける?

困った時
「助けて」と言える?



バースデーチェーン

言葉で伝えるよりも、よりお互いに注目できるし、伝えようと努力もする。聴覚障害体験の時にも使える。

- ①一言もしゃべらず、手・足・からだ全体を使って自分の誕生日を相手に伝えながら、1月1日から12月の早い順に並び、円をつくる。
- ②最後に自分の誕生日を言って確認する。

[声かけ例]

「今からしゃべってはだめだよ。」

「身振り手振りをを使って、みんなの誕生日を教えてください。」

「わかったら、1月1日生まれの人から順番に並んでね」

「時間は3分以内、よいスタート!」



あとしどころ

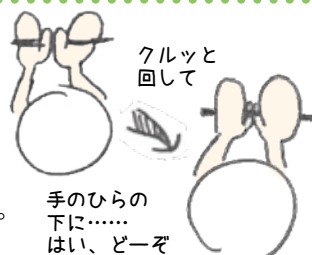
コミュニケーションの方法はいろ
いろだけど、言葉だけじゃないよ。
自分から積極的にコミュニケー
ションをとることが大事。

ペン回し

ボランティア活動の始まりは、「ほっておけない」というお節介!! できた人はできない人見ると、教えたくなる。助け合いが始まる。

- ①親指を上にして両手のひらを合わせて、ペンを親指にはさむ。
- ②ペンを中心に手をひねって、手の甲がペンの上に。

手のひらの
上のペンを



あとしどころ

自分でできる人が
できない人に教えてあげる!!
これが、ボランティアの基本。
おせっかいから始めればよい!!



* 盲学校の友だちといっしょに

長野盲学校と朝陽小学校との交流から

やまびこだより No.136 (2015年度)より



国語の時間

自立活動

歩く練習や見る練習などを行います。
見えにくくても上手に生活するための学習です。



盲学校は、視覚障害がある人たちが、一人ひとりの見え方に応じた学習環境の工夫、様々な配慮のもとで学習している、視覚障害教育を行う特別支援学校です。

長野県内には長野盲学校（長野市）と松本盲学校（松本市）の2校があります。



球技は主にボールを転がしてプレーします。

すべての先生が盲学校で研修

長野市にある長野県長野盲学校と同地区の長野市立朝陽小学校は、40年以上前から定期的に交流を続けています。

朝陽小学校の「友だち委員会」が企画する全校の「交流集会」のほか、各学年毎に学級を決めて交流する「交流学級」など、1年をとおして子どもたちは何度もお互いに顔を合わせます。

「交流学級」は総合的な時間の枠で、朝陽小学校に盲学校の児童が訪ねてレクリエーションゲームをしたり話をしたりして楽しめます。また、プールの授業や社会科見学、遠足、音楽会、クリスマス会、運動会などにも参加し合い、交流後はお互いに手紙を交換するなどして、親交を深めています。

「学区内に盲学校があるのは、私たち教職員にとっても、恵まれた環境です」と話す朝陽小の山浦詩音先生。春、新しく赴任してきた先生はまず盲学校へ職員研修に行くことが朝陽小の慣例です。盲学校でアイマスクや点字の体験をし、どんな児童がいるのか、どんな学習をしているのかを先生自身も学ぶことで、全校が一体となり、みんなの気持ちが通じ合う交流となっているのです。

長野盲学校の関昌浩教頭先生は「先方から一緒に交流しましょうと言ってももらえるのは、大変うれしいことです。交流は大歓迎です」と、学校同士お互い協力を惜しみません。

日常的な出会いの中から

「朝陽小の子どもたちは自分と違うということに偏見を持つ子が見当たらない」と山浦先生は言います。「偏見」は相手を知らないことから生まれるものです。朝陽小の子どもたちは何度も交流を重ねる中で、自然と互いの違いを認め合うことを知り、視覚障害への理解を深めていきました。一方、盲学校の子どものためには、たくさんの人たちとふれあうことで、社会に出る準備として様々なことを学びとっていきます。

日常的な出会いを重ね、交流が続くことが、自然な仲間意識を育んでいくのです。

松本盲学校と旭町小学校との交流

長野県松本盲学校と、すぐ近くにある松本市立旭町小学校は、1980年（昭和55年）から交流活動を続けています。



クラス交流（旭町小）



盲学校生紹介式（旭町小）

主な交流内容

- 松本盲学校の行事
 - ・交流草取り・三九郎・体育祭 など
- 旭町小学校全校行事
 - ・盲学校生紹介式（新学期）
 - ・児童会祭り・音楽会・運動会・クラブ活動 など
- 旭町小学校の交流学級との共同学習
 - ・授業・給食・清掃・ホームルーム
 - ・社会見学・登山、キャンプ など



* ろう学校の友だちを知ろう

長野ろう学校高等部 レモン・デイズの活動

やまびこだより No.138 (2015年度)より

長野ろう学校 高等部 レモン・デイズ

出張手話講座
小学校に行きました！



長野市立南部小学校のみんなと



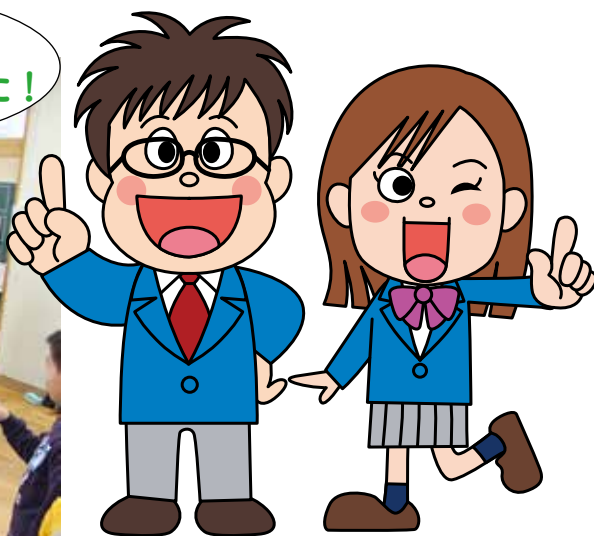
声を出さずにジェスチャーで表現する簡単なゲームで盛り上がります。

「アニメ」って
手話で
どう伝えるの？

手話をクイズ形式で
覚えてもらいました。



こんにちは。



『レモン・デイズ』とは、長野ろう学校高等部の生徒が、挨拶や自己紹介など簡単な日常会話を手話でどう表現するかを一緒に学びながら、お互いに交流を深めていくことで、聴覚障害を知ってもらうことを目的とした活動です。

手話の出張出前講座 レモン・デイズ

ろう学校とは、耳の聞こえない人、聞こえにくい人が通う学校です。長野県には長野市と松本市の2か所にあります。

長野県長野ろう学校（長野市）の高等部では、聴覚障害について知ってもらい、簡単な手話を楽しく学ぶ「レモン・デイズ」の活動を続けています。

「レモン・デイズ」は、8年前、当時、「オレンジ・デイズ」というテレビドラマを観ていた生徒から、「ろう文化を広げるために私たちも何かしたい」と声が上がリ、生徒会活動として始まりました。現在は長野市内の小・中学校、高校、特別支援学校、地域住民の集まりなど、様々な所で出前授業を行っています。

クイズやゲームを取り入れた講座は、特に小学校で好評です。小学生はろう学校のお兄さんお姉さんともすぐに仲良くなって、障害の壁もなく、自然に手話を覚えていきます。

「レモン・デイズの活動は、生徒が健聴の人たちとどうコミュニケーションをとっていけばよいのかを考える良い機会となっています」と担当の内山和久先生は言います。「一般的には支援を受ける側の子たちが、この活動では教えたりサポートをしたりする側になる。そこで自分も人の役に立つことができるんだと実感でき、彼らの自信となっているのです」。

自分たちのことを知ってほしいという思いから始まった活動が、自分自身の成長に繋がる大きな一歩となっています。

ろう学校との交流活動

長野ろう学校小学部は近くの長野市立城東小学校と、また長野県松本ろう学校小学部（松本市）は隣にある松本市立明善小学校と交流をしています。運動会、音楽会、文化祭などの全校交流をはじめ、社会科見学や遠足などクラスごとの交流もしています。特に運動会は、長野、松本両校ともかなり気合いの入る一大イベントです。

「2つの学校で作り上げている運動会」と話すのは長野ろう学校の岸田優代校長先生。運動会前は、練習のために毎日2つの学校を行き来します。応援団長も2人ずつ、校長先生のお話も2人分、なんとお互いの校歌も歌います。

運動会にも思いやりの工夫がたくさんあります。例えばかけっこのとき、スターターの先生は手に赤い手袋をはめています。ピストルだけでなく、手を動かしてスタートの合図を知らせるためです。また、ダンスで移動するときは、まわりの子が「次こっちだよ」ととても自然にサポートをしてくれます。このような心遣いが、当たり前に行われています。

「特に教えたわけではなく、どうしたら伝わるか、一緒にできるかを子どもなりに考えて工夫している」と城東小学校の鈴木貴善先生は話します。

「自分の想いを伝えたい、通じ合いたい」という気持ちが自然と行動に繋がっているのです。



ろう学校はどんな人たちがいる
学校か知っていますか？

ろう学校（＝聴覚障害特別支援学校）は
「聴覚に障害がある人たちのための学校」です

長野県内には、長野ろう学校（長野市）と松本ろう学校（松本市）の2校があります。幼稚部、小学部、中等部、高等部の一貫教育で、寄宿舎もあります。

ろう学校は、在籍するしないにかかわらず「聞こえ」や「ことば」に関する教育相談、支援、情報提供を行う聴覚障害のサポートセンターの役割も果たしています。

長野ろう学校 高等部生徒会顧問
内山 和久 先生

レモン・デイズの活動は、特に小学生からはダイレクトに反応が返ってくるので、生徒たちの刺激になるようです。小学生にとっては、自分たちと異なるコミュニケーションの技を見て「すごい。勉強したいな」と思うきっかけにもなります。

この交流を通して、「楽しかった。また会いたい」と、障害を超えてお互いを身近に感じてもらえたらうれしいですね。



どうやって学んでいるの？

補聴器で聞こえを補い、相手の口の形や、手話も用いて話している内容を聞き取ります。



目が聞こえないと、どんなことに
困ると思いますか？

こんなことに困ってしまいます！

- うしろからきた自動車や自転車が近づいていることに気づかない
- 字幕のない映画やアニメ、テレビ番組が楽しめない
- 電車やバスのアナウンスなど呼び出しがわからない
- 買い物するとき、お店の人とのやりとり ……など



私たちは「聞こえ方」がそれぞれ違います。

「聞こえない」
音がまったく聞こえない

「聞こえにくい」
はっきりと聞こえない

「聞き分けにくい」
音が聞こえても何の音が分かりにくい。



何を勉強しているの？

学習内容は地域の小学校と同じです。そのほか「自立活動」の時間があり、児童の実態にあわせて、指導を行っています。手話や音声言語の「ことば」の力をつけ、コミュニケーション力を養ったり、社会制度を学んだりします。放課後には個別指導も行っています。



校内には「聞こえ」を補う設備があります。

ちょボラ・ワンポイント

Let's Try

聴覚障害のある人と話す時は…

1 相手の顔を見て、ゆっくり、
大きな声で伝えよう

何かを伝えたいときは、相手の正面に立って目を合わせ、はっきり口を動かして、ゆっくりと話しましょう。

ひろし です



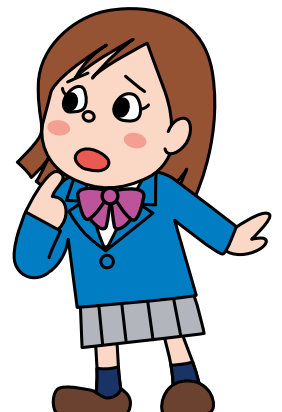
2 短い文を区切りながら話そう

「わ、た、し、の……」のように一音ずつ区切らず、「ぼくの、名前は、ひろし、です」と、短い文を区切って話しましょう。

3 文字を書いて
伝えよう（筆談）

4 目で見てわかるものを使う

- 体や顔の動き（ジェスチャー・表情）で伝える
 - 手話、指文字を使う
- そのほかに、空書き（指で空中に文字を書く）という方法もあります。





* 地域とのつながりを感じて

「全校奉仕活動」から地域をみつめ直す

やまびこだより No.137 (2015年度) より

清水中学校の女鳥羽川清掃(「全校奉仕活動」)は 35年以上続いている伝統の活動です。

活動を行った生徒の感想

- ♥ 小学校のときは先生に言われての活動でしたが、中学校になって先輩たちが自ら計画して活動していてすごいと思いました。
- ♥ ボランティアをしているんだっていう充実感があり、気持ちいいです。
- ◆ 集めた草は100袋以上になったこともあり、袋が並ぶ様子は圧巻でした。
- ♣ 地域の方が喜んでくださるのは、うれしいことです。



初めて
参加した時は…

いやだなあ……



暑い中、大変だし、
面倒だなあと
思っていました。

だけど…
35年以上も
続けてきたなんて、
なんか、
すごいかも！



自慢の
活動です！



誇れる伝統の始まり

今から35年前の1980年(昭和55年)、松本市立清水中学校の生徒会で、「地域に貢献できる活動をしたい。せっかくやるのならお金を集めるのではなく、自分たちの力でできることをしよう」という声があがりました。

学校の近くを流れる女鳥羽川は子どもたちにとっても格好の遊び場でした。川にゴミが散乱していることに気づいた生徒が親しみのある地域の川をきれいにするのはどうかと提案。まだ「ボランティア」という言葉は一般的でなく、「奉仕活動」と呼んで、生徒会を中心とする女鳥羽川の清掃は始まりました。

全校参加による活動へ発展

第1回は、その頃土曜日が午前授業だったため、午後の時間を利用し、全校3分の1の有志生徒が活動に参加。皆で鎌を使って大きく伸びた草を刈ったり、ゴミ拾いをしたりしました。翌年

の第2回から参加者は次第に増えていき、そこで生徒会では、全校参加の活動を目指すことにしました。

「奉仕活動なのだから、強制してやるものではない。やる気のない人までやる意味はあるのかな」といった声も出ましたが、1988年(昭和63年)に「全校奉仕活動」として全員参加となりました。

当時、全校で奉仕活動に取り組んでいる学校は少なく、「女鳥羽川を守る会」から表彰され、地元でも評判の活動として注目されます。10年目の1990年(平成2年)には「女鳥羽川をきれいにする会」から、翌年には「長野県治水同盟」から河川功労者の表彰もされました。

伝統の活動となった女鳥羽川清掃でしたが、2003年(平成15年)、草刈りのアレルギー症状対策もあり、他の奉仕活動を組み入れて、公園や薄川の清掃、近隣の福祉施設との交流へと活動は広がりをを見せていきました。

地域に生きる自分の役割を見つめ直す

現在、「全校奉仕活動」は「地域に役立つ活動」として総合的な学習の時間に行われており、「地域に生きる自分の役割を感じるきっかけになっている」と小川竹雄教頭先生は語ります。

2012年(平成24年)開催の「福祉教育のつどい」(長野県社協・長野市社協共催)では、学習院大学教授の長沼豊氏が次のような指摘をしています。「小中学校で地域のゴミ拾いをやらされて、ボランティアが嫌いになってしまう人が多い。そこで、「役に立ったのだ」という実感を持たずばいぶん違う。それを確認させてあげる振り返り学習が非常に大事です」。

清水中学校の生徒たちは代々、活動を始めた先輩たちの思いと伝統を誇りとして受け継ぎ、地域に貢献していることを感じてきたからこそ、35年以上もこの活動が続いてきたのではないのでしょうか。

どうして、先輩たちは
この活動を
始めたのだろう？



最初は
有志の人たちの
活動から
始まったのか。

全員参加になるまで
いろいろと意見が
出たんだろうな。

地域の人から
感謝されるのは
うれしいよね。

ありがとう！



地域の人といえば…

学校の授業や活動では
地域の方のお世話に
なっているんだよね。



小学校と比べれば
地域の人との
つながりが薄くなった
気がする……。

だから…

お世話になっている
地域の人たちのために
何かひとつでも
役立てたら…。



よし！
一生懸命
やるぞ！



なんてったって…

きれいになったぞ！
気持ちいい～。

この達成感が
たまらない！



「全校奉仕活動」における生徒会の役割

1. 生徒会の正副委員長による常任会で、当日に効率よく作業ができるように段取りを考えます。
2. 事前に全校の打合せ会を開き、スライドを交えて奉仕活動の意義と内容、段取りを説明します。
3. みんなでどのように取り組んだらいいのか、生徒会長から全校に呼びかけます。
4. 奉仕活動が終わった後、各分担場所の代表者が活動内容を発表して、振り返りをし、次の活動につなげます。

女鳥羽川清掃から「全校奉仕活動」へ

1980年（昭和55年）

女鳥羽川清掃（草刈り・ゴミ拾い）の開始



全員参加の頃の女鳥羽川清掃

生徒総会で「奉仕活動としてみんなで何かできることをしよう」という声があがり、有志の人たちの参加から始まりました。

まだ終わっていない
クラスのところも
手伝おうか。



1982年（昭和57年）

草刈りを中心とした清掃

1988年（昭和63年）

全員参加の行事に

奉仕の気持ちがない
人まで参加させるのは
まずいと思う。

1990年（平成2年）～

各種団体から表彰

全校でやることに
意義があるのでは……。

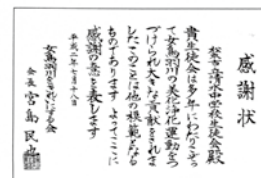
これからも続けていく
ことが大事だと思う。

2003年（平成15年）

活動内容を広く展開

草刈りのアレルギー症状がある生徒への
対策と、他のボランティア活動の展開へ。

薄川や公園、通学路なども清掃しよう！
児童館・デイサービスへの交流訪問もやろう。



地域の方々など
から何度も表彰

励みになります！

2009年（平成21年）

年間の活動が春と秋の2回に

2015年（平成27年）

13の「奉仕活動」を実行中！



薄川清掃



児童育成クラブ訪問

いろいろな人との
ふれあいも楽しみ！



デイサービス訪問

私たちも地域の一員だから、
地域の人とのつながりを
大切にしていこう！

もっと地域に貢献できるような活動を目指して
次期生徒会にも伝えていきます。

2015年度生徒会役員





私たちの思いをまちづくりに

こども議会（中学生議会）の事例から



やまびこだより No.139 (2015年度)より

私たちの地域をより良くしたいから…

まちの議会で提言しました！

県内各地の市町村では、子どもの視点でまちづくりへの提案を行う「子ども議会」(中学生議会)を開いています。



信濃町子ども模擬議会

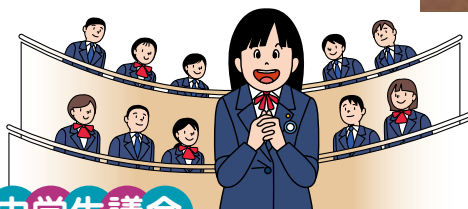
信濃町立 信濃小中学校

私たちの提言が
実現すれば
もっとステキな
まちになるよね！



高山村中学生議会

高山村立 高山中学校



安曇野市中学生議会

安曇野市内の中学校7校 代表25名
穂高東・穂高西・三郷・堀金・豊科北・豊科南・明科 中学校

子ども議会の役割 協働のまちづくりのために

県内各地の市町村では、子どもの視点でまちづくりへの提案を行う「子ども議会」(中学生議会)を行っています。対象は、小学生から高校生にわたる議会もあれば、中学生のみの参加など、自治体により様々です。担当部署も広報課や議会事務局、地域づくり課など各市町村により特色があります。

安曇野市では中学生の視点を協働のまちづくりに生かすため、市内7校の中学生を対象に3年前から「中学生議会」を開催しています。中学生議会を担当している「地域づくり課」のテーマは「協働」。「自分だけではできない部分をお互いで補い合っていくことが協働の原点。」と話するのは、地域づくり課課長の宮澤万茂留さんです。

「中学生には気づいた課題に対し、自

分だったらどうするのかを考えてもらう機会にしてほしい。その結果、安曇野がより一層好きになったり、今後地域に携わっていくことに繋がれば嬉しいですね」

中学生議会をとおして自分たちの住むまちを知ることでも今まで気づかなかったまちの魅力を再発見でき、今後のまちづくりに主体的に関わるきっかけとなっています。

「ふるさと学習」の集大成として

信濃町の信濃小中学校では、9年生が「ふるさとと共に生きる、ふるさとのために私にできること」をテーマに1年間学習をしてきた集大成として、「信濃町子ども模擬議会」で発表しました。

事前学習として、役場の方や地元の脚本家、県外から移住してきた方など様々な方から「ふるさととはなにか」をテーマにお話しをしていただき、ふるさ

とに対する想いや地域を元気にするための取り組みなどをお聞きしました。また、保護者の皆さんにもふるさとに関するアンケートを実施し、ふるさとに対する意識をデータとして見える化したりと、事前学習をとおして町をよりよくするために自分たちにはなにができるのかを考えました。

「そんなのダメ、できっこないと否定するのではなく、子どもの自由な発想に任せようという気持ちを大切にしています」という担当の馬島敦子先生。子どもならではの発想が、大人には気付かなかった視点に気付かせてくれます。「学習が進むにつれ、子ども自身も自分のこととして考えていく。やっぱり“ふるさと”なんだと思います」

自分の生まれ育った“ふるさと”について考えることが、地域をつくる一員である自分自身と向き合う時間にもなっています。

「ふるさとと共に生きる」 ～ふるさとのために私にできること～

学習の流れ

テーマが決まるまで……

1 「ふるさとについて」のアンケート

ふるさとについて考えてみよう
生徒と保護者へのアンケート

- 町のいいところ、足りないと思うことは？
- 次世代のために残したいもの、大切にしたいものは？

2 学習会・交流会

ふるさと映画会『ふるさとがえり』鑑賞
脚本家 栗山宗大さんとの交流会

地域講師を招いての学習会
「信濃町で起業することの魅力と課題」

「信濃町長期振興計画」についての学習会
「癒しの森事業」「町づくり計画」について

学習会・交流会を通して
見えてきたものは？
「ふるさととは……」

3 「私の課題」づくり

テーマ「ふるさとと共に生きる
～ふるさとのために私にできること～」

- ① 私にとっての「ふるさと」とは
- ② 私が願う、ふるさとの将来像は
- ③ ふるさとのために私が取り組みたい課題

取り組みたい課題

- ・なぜそれが必要なのか、
- ・具体的な手立てや方法、ビジョン
- ・ずっと語らし続けたい町にするために、持続可能な方法は？

4 訪問学習・調査学習

調べてみよう 聞いてみよう 見学してみよう！



地域の方、観光客、役場や施設に出かけてインタビューしたり、ゴミを拾いながら調査をしたり……。

信濃町立 信濃町小中学校 9年生

「子ども模擬議会」は、次代を担う子どもたちに、町づくりに関心を持ってほしいと、信濃町の町議会が実施。真剣な質疑と答弁が交わされました。

信濃町子ども模擬議会



こんな提言も
しました！

仮想姉妹都市と提携を！

仮想姉妹都市と提携し町の
知名度を上げれば、観光客
が増え、移住者も増えるの
では……

この場面で
グラフを示すと
わかりやすいよね。



具体的な数字が
あると説得力が
増すね。

私たちの提言

旧小学校跡地に宅地を造成し、定住者を増やす
商店街の活性化を！

旧小学校を図書館に！

病院を健康増進の場に

ゴミのない町にするためにペットボトルで
鉢植えを作り、花を飾ったらどうか

森林の手入れをし、景観を高める

特産物で町を有名にして人を呼び込もう

まとめた案を信濃町議会
議事堂で発表

5 プレゼンボードにまとめて 発表



* 僕たちのアイドル、小夏ちゃん 「開田科」で見つけた地域の魅力

木曽町立 開田小学校

やまびこだより No.136 (2015年度)より



でも、この後、みんな抜かれました！

小夏ちゃんとの競争



小夏ちゃんと田起こし



おいしく
できるかな。



名人と sunkigaki 作り

開田小学校は、御嶽山をのぞむ標高1200メートルの高原にある全校児童67人の学校です。

昨年から木曜日の5時間目を「開田科」として、自分たちの住んでいる開田についてもっと知ろうという時間ができました。学年ごとにそれぞれが知りたいことを、地域の人たちにも手伝ってもらいながら学習しています。

今までに標高の高さを生かした星の観測や、伝統料理である「sunkigaki」作り、御嶽山の学習などを行ってきました。

開田で一番の人気は、なんといっても木曽馬です。木曽馬の小夏ちゃんは僕たちのアイドルで、5年生の田んぼの田起こしにも参加します。運動会では児童会長が小夏ちゃんに乗って入場したり、参加者と短距離走をしたりします。学校には乗馬クラ

ブがあって、馬の世話や乗馬を楽しんでいます。木曽馬は胴長短足でおとなしく、とってもかわいいですよ。

僕たちはこれまで開田のいろいろな魅力を発見しました。こんな開田に、「もっとたくさんの人たちが来てくれるといいな」と思います。

* JRC委員会活動 すてきな公園にしたいな

須坂市立 小山小学校

やまびこだより No.136 (2015年度)より



花の苗をプランターに植え替え



お客さんが
喜んでくれると
いいな。

須坂市動物園の
入り口へ運びます。



公園内でのマラソン大会



私たちの学校の近くにはマラソン大会などでお世話になっている臥竜公園があります。JRC委員会では、この公園のために自分たちにできることをしようと考えました。

「桜がない時は寂しい感じがするよ。花を植えたいな」という意見が出ました。そのことを公園の管理事務所の方に相談したところ、「桜の根をきずつけてしまうので、花は植えられないのです」という返事が

返ってきました。

そこで、もう一度考えて、「植えられないなら、花のプランターを置くのはどうでしょう」と提案しました。水やりの心配もありましたが、公園の方が花の世話をしてくださると聞き、プランターに花を植えることに決めました。

花のプランターを置いてもらうようになっ

て3年目になります。一輪車で運んで公園内の須坂市動物園北口に置かせてもらいます。今年は春にビオラとパンジー、夏はサルビアとアゲラタムなどを植えました。

動物園の方からは「季節の花でお客様をお迎えできてうれしいです」、観光客からは「お花があって、とてもきれいですね」と言っていたさき、うれしかったです。

これからも、もっとすてきな公園になるように、できる活動を行っていきたいです。

＊おなかも心もいっぱい！ 地域の方と祝う「めぐみの会」

長野市立 寺尾小学校

やまびこだより No.138 (2015年度)より



大きな大根が
とれたよ！

おいしい
お餅を作るぞ！

ぎんなんの
においも、
へっちゃら！



たくさん
のお客様が来て
くれました。

自然に感謝、人に感謝、
おいしい楽しい「めぐみの会」

寺尾小学校には、全校のみんなが楽しみにしている「めぐみの会」という行事があります。「めぐみの会」とは、自然の恵みに感謝しながら、全校で行う収穫祭です。5年生が作った米でお餅を、2年生が育てた大豆できな粉を、そして各学年で栽培したサツマイモ、大根、ジャガイモなどの野菜が入った豚汁をお家の人と一緒に作ります。「めぐみの会」のために、学校のぎんなん



を地域に販売する活動も行っています。「宝探しみたいで楽しい!」「くさいのにも、だんだん慣れてきた!」ぎんなんの強烈なおいにも負けず、全校が力を合わせてがんばります。

また、この会にはお世話になっている地域の方を招待して、感謝の気持ちを伝えるという大切な目的があります。社会

見学や地域探検、総合的な学習や読み聞かせなど、日々の学習活動を支えてくださった地域の方へ、感謝の気持ちを込めて「おもてなし」をする大切な時間です。今年は50名ほどのお客様と一緒に収穫の喜びをおなかいっぱい味わいました。

「めぐみの会」で地域の方々とのかかわりを深め、これからも地域の人や自然、そして『ふるさと寺尾』を大切にしていきたいです。

事例紹介 ● 県内各校の活動より

＊光をつむぐ虫「天蚕」 地域の宝を受け継ぐ

安曇野市立 穂高北小学校

やまびこだより No.138 (2015年度)より



卵は意外と
固いんだね。

天蚕センターで和紙に卵をのりつけ



クヌギの葉に
似ているね。

大きくなったヤマコ



やったー！
ぬけたー。

脱皮



緑色の繭がたくさん！



きれいな
繭を作り
始めたよ。



きれいな
コサージュが
できたね。

「天蚕」を知っていますか？ クヌギの葉を食べ、自然の光と林の中で育ち、美しい緑色の繭を作るヤマコのことです。

穂高北小学校のある有明地区では、古くからヤマコ飼育が盛んでした。学校での飼育が始まったのは30年以上も前です。今は、3年生が教室で水さし飼育、4年生が敷地内の天蚕林で野外飼育をしています。3年生には4年生が、4年

生には天蚕組合の方や地域の方が先生となり、飼育の仕方を教えてくれます。

5月、4年生は天蚕センターへ「のりつけ」に行きました。センターの方に教えていただきながら、卵をのりで和紙につけていきます。初めての経験にワクワク。この卵を使って、3、4年生の天蚕飼育が始まります。

3日ほどするとヤマコがふ化します。その後、脱皮の瞬間に立ち会ったり、毎日クヌギの葉を取りかえたりしながら、成長を

見守ります。

7月、ヤマコは緑色の繭を作ります。繭は、中のさなぎを乾燥させて保存し、6年生の3学期にコサージュを作ります。この活動も地域の方に教えていただきます。できあがったコサージュは、卒業式で保護者の胸に飾られます。

この地域の宝を、ずっと大切にしていきたいです。



地域が大きな学校に 「地域の先輩方から学ぶ」取り組みから

上田市立 第五中学校

やまびこだより No.137 (2015年度) より



ゆっくりやれば
大丈夫。

困ったときも助けてもらいました。



こんなにきれいに
できるんだ。

「地域の先輩に学ぶ」
21 講座 (平成27年度)

お手玉、童謡をうたう、コカリナ、洋裁、廃油石けん作り、
写真、茶道、調理そば・パン・弁当、アロマ、器械体操、
ニュースポーツ、ちぎり絵、絵手紙、陶芸、木彫り、切り絵、わら細工、理科
実験工作、ドライフラワー細工、銅製スプーン作り、観光パンフレット作り



よく見て、繰り返し
しましょう。

五 中には、様々な分野の地域の達人を講師にお招きして、1年生から3年生と一緒にいろいろな体験を通して学習する「地域の先輩方から学ぶ」時間があります。学んだことは、講師の先生への感謝を含め、五中の文化祭「鳳祭」で発表します。

今年度は21講座(年間8時間)が開設されました。これまでの学びの中で、迷ったり、失敗したりして落ち込みそ

うなときは、講師の先生がいつも声をかけてくださいました。おかげで「頑張れば、壁を乗り越えられる」ことが分かりました。

このように地域の方から学び、共に活動することは、自分を見つめたり、ものの見方を広げたりすることのできる貴重な時間となっています。

また、6月には地域の方々の力をお

借りして、保育園児と一緒に花壇づくりを行い、世代を超えた交流をしました。今、五中にはその花々がきれいに咲いています。さらに今年度、地域の方々による五中応援団「チーム鳳」が発足し、放課後学習などで教えていただいています。

私たちにとってこれからも、「地域が大きな学校」です。



「満天の星」の歌がつなぐ絆 地域の福祉施設との交流

千曲市立 更埴西中学校

やまびこだより No.137 (2015年度) より



振り付けを覚えて、
クラスみんなに
教えよう。

事前練習の様子

楽しい交流会に
しましょう。



菓子箱の箱折を
しています。

全校生徒が参加する
福祉交流会

普段、どのような
仕事をされて
いますか？

お互いに日々の様子について質問し合いました。



「満天の星」の交流の歌に合わせて。

みんな
盛り上がりよう！

*交流の歌の中には、手話が入った歌もあります。

田 毎の月で有名な娘捨の棚田をのぞく我が校では、いなりやま福祉会が運営する福祉施設「満天の星」と「いなりやま共同作業所」の方々と、様々な関わりをもち続けています。全校生徒が参加しての福祉交流会は、利用者の方々をお招きして、一緒に歌ったり踊ったりする一番の交流の機会です。

この交流会は、15年ほど前、当時「満天の星」を訪問していた福祉委員と所長

さんが「全校での交流ができないか」と話し合ったことから始まりました。

交流会を成功させるために、人権福祉委員会の委員が事前に施設を訪問して、「満天の星」の交流の歌や振り付けを教えてもらい、各クラスで練習を重ねました。当日は練習の成果を発揮して交流を楽しみました。

福祉会の職員さんや利用者の方々から

私は、「満天の星」と家が近くで、今回交流した方がいつも話しかけてくださいます。その時は、本当に嬉しいです。今回の交流を機に、もっと話をしたり、あいさつをしてみようと思います。

は、「音楽での交流会はとても楽しく、皆で元気に歌うことができた」「生徒さん達に歓迎してもらって、うれしかったです」と喜んでいただきました。

このような心温まる交流を、これからもずっと続けていきたいと思っています。

＊ 地域の方の熱い思いを受け継いで 「校歌コンクール」の取り組みから

松本市立 松島中学校

やまびこだより No.139 (2015年度) より



校歌コンクール本番



ただいま練習中



歌うポイント

みんなの声と心をあわせて歌えました。



地域の方々にも聞いていただきました。



250回以上練習してきた成果が出せたぞ

昭和33年4月、新校舎とともに、松島中学校はスタートしました。その後、校歌制定の機運が高まる中、「校歌は自然に生まれたものであってほしい」という願いから、3年後、全国でもまれなPTA作詞の校歌が誕生しました。それから約60年、今では、世代を超えて歌うことができる校歌となっています。

そして平成24年4月、「私たち中学生だけでなく、いろいろな方と一緒に松島中学校の校歌を歌いたい」——そんな思

いから校歌コンクールは始まりました。

コンクールに向けてクラスごとに目標を決め、「優秀賞」を目指し、朝・帰りの学活などの時間を利用して毎日歌います。練習を重ねる中で、クラスの団結力が高まり、「校歌を大切にしたい」という思いもさらに強くなっていきました。

5月の本番では、地域の方を審査員と

して招き、私たちの頑張りの姿を伝えることができました。最後は世代を超えてみんなの心が一つになりました。

これからも、校歌に込められた松島中学校の先輩方、地域の方、保護者の方の熱い思いを受け継いでいきたいです。

＊ さくらプロジェクト 被災した仙台市立高砂中学校との交流

伊那市立 東部中学校

やまびこだより No.139 (2015年度) より



高砂中からの贈り物



仙台の兄弟桜



高砂中学校を訪問 (H26)

高砂中の皆さんは
とても明るく、
力強かったです。



スカイプ交流 (H27.3.11)

遠くにいるのに
考えていることは
一緒なんだ。

- 笑顔を取り戻すきっかけをつくってくれて、本当に感謝しています。
- 地域の方々も元気してくれた桜は、これからもみんなを励ましてくれると思う。

東部中学校は、東日本大震災の被災地である宮城県仙台市立高砂中学校と「さくらプロジェクト」という交流活動をしています。

津波の塩害により校庭の桜2本が枯れてしまった高砂中に、東部中から伊那市高遠の門外不出のタカトオコヒガンザクラを2本贈ったことから両校の交流はスタートしました。

高砂中に植樹された2本の桜は「未来・希望」と名付けられ、長野県から遠く離れた仙台の地において大切に育てられ、昨年4月にはたくさんの花を咲かせました。

平成25年度には東部中の文化祭「すず竹祭」に高砂中の生徒会の皆さんが参加してくれました。両校の生徒会長が永い交流を誓い合う、「絆宣言」を声高らかに表明しました。

平成26年度、東部中の校門に仙台の兄弟桜「輝」「虹」が植樹され、27年度には両校の生徒会役員がそれぞれお互いの学校を訪問しました。直接、語り合える交流はとても充実したものになり、尊敬と感動を共有できる貴重なひとときとなりました。

平成28年度は両校で、さくらプロジェクトのテーマソングを作っていきます。

* 東北の被災地を訪問

夏休み高校生ボランティア活動より



報告会

被災と復興をテーマに

飯田市社会福祉協議会では、東日本大震災直後から、被災地支援活動を継続しています。その一環として、夏休み中に、飯田下伊那地域の高校生が被災地を訪問し、ボランティア活動を行っています。

今年度は、「被災と復興」をテーマに掲げ、7月30日から8月1日の3日間の日程で支援活動を実施しました。宮城県石巻市、南三陸町、女川町を訪れ、ボランティア活動と現地の視察を通じ、大震災から4年たった今、「被災地の復興はどこまで進んでいるのか、これから私たちにできることは何か」を高校生が自ら見て、考える機会となりました。

今回で4回目となった被災地支援の高校生のボランティア活動ですが、毎

回高校生は、それぞれに被災地への想いを持ち、参加しています。

訪問した被災地は、物理的な復興も心の復興も十分ではありませんでした。

真の復興が何であるかは、被災者でない私たちには、ずっと答えが出せないのかもしれませんが、震災を風化させない取り組みを真の復興と位置付け、今後も被災地支援を続けていきたいと考えています。



石巻川開き祭りでボランティア参加

【参加した高校生の感想より】

「自分で実際に行ってみたいとわからないことがたくさんありました」

「参加できて、高校生の私でも役に立てたと思います」

「自分と同じ年の子どもたちが、町のために、将来の人々のいのちを守るために、できることを必死で考え、実行し、まちづくりに積極的に関わっていることが、事前学習で見た飯田大火の紙芝居の、りんご並木のために活動した中学生の姿と重なりました」

【自分たちができること】

- 震災を風化させない。
- 自分で見て思ったことや聞いた話を周りの人に伝える。
- 災害に負けないまちづくりを進める。
- 普段から、家族や友達、地域の方々と大事にする。

	各班の課題	テーマ
A 班	【南三陸町】 入谷 yes の工房訪問から	・ 若い世代が夢と希望を持てる社会の実現とは何か。 ・ オクトパス君について調べる
B 班	【南三陸町】 海から学ぶプログラムから	・ 漁業に携わっている人たちは、 漁業復興をどのくらい実感しているのか。
C 班	【石巻市】 石巻の視察・ボランティアから	・ 4年たった今、石巻市はどこまで復興したのか。 ・ 川開き祭りに対する市民の思い
D 班	【女川町】 女川の視察から	・ 女川町とJR 石巻線の震災当時や復興の様子を知ろう。 ・ 被災地にとって、今必要なこと、私たちに何ができるかを考えよう。



事前学習

参加者16名が4つのグループに分かれ、初めて会った仲間と話し合いに戸惑いながらも、班ごとにテーマを決めました。

A 班

「オクトパスくん」
新たな地域活性化策の創出
入谷yesの工房訪問から【南三陸町】



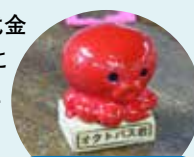
「オクトパス君」の色塗り体験

震災直後の混乱の中で、町が活気づくためには“生き生きと働くことが出来る環境”が必要であるとの理念から、雇用促進・地域振興のために設立されたのが、入谷 Yes 工房。南三陸町の中でも、唯一津波の被害を受けなかった入谷地区で、廃校を利用し、工房を聞き、南三陸町の名産であるタコをモデルにした「オクトパス君」のグッズを製作・販売。今回は、「オクトパス君」の文鎮の色塗り体験を行いました。

作業の合間には、工房の広報とデザインを担当している大森さんより、「震

災前は、若者の就職は、漁業か農業ぐらいしか選択肢がなかったが、震災を経て、新たな雇用も創出されつつあります。」とお話を聞きました。

会が目指すものは、支援ではなく、自分たちの頑張りによって町を復興させること。お土産に、みんなで工房に売っていたオクトパス君グッズを購入しました。代金が少しでも、復興に協力できたのであればうれしいです。



オクトパスくん

海から学ぶプログラム

B班 今も漁師を続ける南三陸の若い人たち
元漁師による舟語りと浜料理 [南三陸町]

漁船に乗って養殖場へ



実際に漁船に乗り込み、ホヤ・カキ・ホタテの養殖が行なわれている場所を見学しました。

私たちが乗った漁船は、津波で陸地に打ち上げられ再度漁ができるように修繕された、漁師さんたちの“もう一度頑張ろう”という気持ちのこもった船でした。

4年経った現在、ようやく一定の出荷ができるだけの養殖環境が整ってきたそうです。震災前と比べると、収入額は遠くおよばないものの、湾の水質が良いものとなり、海産物の質は向上しているそうです。

家族に反対されながらも、漁師を続けることを選んだ漁師さん。海の仕事が好きで、今も漁師を続けている、と話してくれました。

船上では、漁師さんたちが大事に養殖しているホヤとホタテを水揚げし、その

場で食べさせていただきました。海のないう長野県に住む私たちには、減多にできない体験をさせていただきました。

一方、自然塾(食堂)の津田さんは元漁師。震災で船を失い、現在は、食堂を経営しています。

震災直後、自宅も漁船も失い、生活の全てに絶望していた時、友達からプレハブハウスを譲り受け、多くの仲間助けられ、現在に繋がっているという話をお聞きし、人と人との絆の大切さを教えていただきました。

南三陸防災庁舎



震災遺構として残っている建物の周りでは嵩上げの工事が進んでいます。

石巻川開き祭り

C班 5000個の灯籠に想いをのせて
[石巻市]



石巻川開き祭り 流灯の様子

石巻市では、石巻川開き、祭りの流灯のボランティア活動を行いました。約5000個の灯籠を、200名ほどの石巻市の市民ボランティアと一緒に製作。流灯の時には、ボランティアが北上川までの約200mほどの距離に並び、一つ一つ手渡しで、大切な灯籠を運びました。川面近くの人まで灯籠が渡ると、中のろうそくに火をつけ、川に流します。

なかには、「そちらは孫たちと楽しくやっていますか。こちらは元気です。一人の生活はなかなか慣れません。」「○○ちゃん、パパとママはずっと忘れないよ。」など、震災で亡くなったご家族へのメッセージが書かれたものもたくさんありました。

そんなメッセージを見て、涙をこらえながらボランティア活動を続けた高校生もいました。色とりどりの灯籠が流れていく様はとても幻想的でしたが、震災で家族を亡くされた方々の想いのこもった灯籠は、物悲しく感じられました。



女川町の復興

D班 再建された駅舎
いのちの碑プロジェクト [女川町]



再建された女川駅舎

東日本大震災で、震源地に最も近く、津波の到達時間が最も早かった女川町は、町の約8割が津波の被害を受けた町です。語り部さんから、当時の状況をお聞きました。避難所になっていた体育館での出来事、遺体安置所の様子、近所の人が遺体で見つかったこと、自衛隊が来るまでの3日間、住民で助け合って過ごしたことなど、被災された方のお話は、想像を絶するものでした。

当時は何かしてもらおうことが当たり前になっていたが、その時助けてくれた人々に、復興している姿を見に来て欲しい、とも話されていました。

石巻市から女川町までは、今年の3月に全線開通したJR 石巻線で移動しました。かもめが羽を広げた姿をイメージして作られた女川駅舎は、震災前にあった旧駅舎より内陸に200m入ったところにありました。駅周辺は、集合型商業エリアや、地域交流センターなどの建物を建築中で、住宅はこの一帯には建せず、居住地は高台になるそうです。



女川交番

女川町の中学生在が、自分たちの手で、1000年先まで記録を残そうと、津波が到達した地点よりも高いところに、石碑建立が行われています。

「大きな地震がきたら、この石碑よりも上に逃げてください」「家に戻ろうとしている人がいれば、絶対に引き止めて」等、自分の命を守るため、また、これから生まれてくる人たちに、あの悲しみ、苦しみを、再び合わせたくないという思いから、町内17ヶ所に建てられる予定。

このプロジェクトは後輩たちが受け継いでいくそうです。



女川いのちの石碑

福島県飯館村のなかよし学級の友だちに 本のプレゼントをしよう！

飯島町立 飯島小学校

やまびこだより No.136 (2015年度) より



あったかい
気持ちが
うれしいね。

飯館村のお友だち

飯島小の
みなさん、
ありがとう！



販売学習「なかよしマーケット」

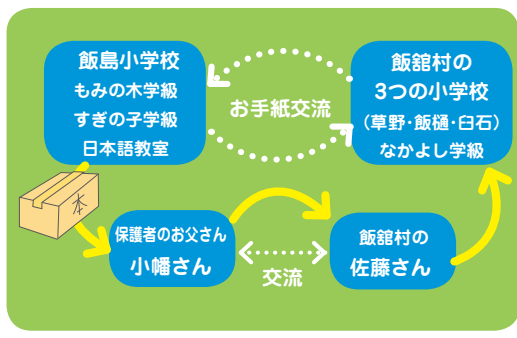


本が届いたよ。

福島のお友だちの役に
立ってよかったです。

東日本大震災のときに起きた原子力発電所の事故によって、福島県飯館村の3つの小学校の子どもたちは、隣の川俣町に避難し、合同の仮設校舎で学んでいます。

そのため、図書館がありません。そこで、飯島小学校のもみの木学級・すぎの子学級・日本語教室では、昨年、飯館村の小学校なかよし学級の友だちに本をプレゼントしました。喜んでもらったので、今年もプレゼントの計画をしています。



販売学習の売り上げ金で買った本とメッセージを飯島町の小幡さんから飯館村の佐藤さんを通じて届けてもらいました。

ひまわりの種を贈ろうプロジェクト 宮城県山元町との交流

上田市立 真田中学校

やまびこだより No.136 (2015年度) より



山元町を訪れ、やまもと幼稚園や小中学校、仮設住宅に住む方などにも種を届けました。



私たちに
できることは…

震災を
忘れないでいよう！
気持ちを届けて、
元気になって
もらおう！



津波の爪痕

ひまわりを
育てよう、咲かそう、
贈ろう！



みんなで種まき

真田中学校では、東日本大震災で被災した宮城県亘理郡山元町に「復興の花」ひまわりの種を贈ろうプロジェクトが続いています。山元町との交流は、震災直後、同町のやまもと幼稚園にお菓子や落書き帳を贈ったことから始まりました。

平成 24 年、同園から震災で亡くなった卒園生が育てていたひまわりの種が届

きました。同園では除染作業のため、植えたひまわりを全て刈り取らなければならず、そのことを知った生徒が「真田中学校でひまわりを育てて、種を届けよう」と取り組んだのがプロジェクトのきっかけです。

平成 26 年からは有志の活動から生徒会活動に発展し、「震災を忘れないでいよ

う」「気持ちを届け元気になってもらおう」という想いから地域の方にもひまわりを育ててもらい、同町の小中学校や仮設住宅に住む方などにも種を届けました。

今年も 10 月にひまわりの種の採取を行い、真田から元気の種を届けます。



虹のかけ橋プロジェクト BOSAI ミライ交流 in SUWA 被災地と諏訪市の子どもの交流

諏訪市内の小・中・高校生

やまびこだより No.138、139 (2015年度) より

虹のかけ橋プロジェクト

諏訪市内の小・中・高校生が被災地訪問

諏訪市の小・中学生は、平成25年3月から、東日本大震災の被災地の子どもたちと互いに訪問し合い、交流を続けています。



東松島市の被災跡地を訪問

被災した方から話を聴きました



ながつらうら
石巻市の長面浦～大川小学校を訪問



被災地の子どもたちと
霧ヶ峰高原で

東日本大震災を未来に伝えていくために、私たちも知って、伝えて、もっと勉強することが大事なんだと思いました。

子どもの笑顔はみんなの力になる。そして、大人には大人の、子どもには子どもの「力」があると思う。

参加した
小・中学生の
感想

今、私たちが思っている当たり前は全然当たり前ではない。家があり、家族がいて、一緒に学べる仲間・友だちがいることに感謝していきたい。



メッセージカードにエールをこめて 白馬村復興ボランティアセンターの取り組みに参加

白馬村立 白馬中学校



約100枚のカードにメッセージを書きました



2月3日の節分に合わせ、白馬村復興ボランティアセンター（白馬村社会福祉協議会）では、2014年に起きた神城断層地震の被災地区に住んでいらっしゃる方や仮設住宅にお住まいの方々を元気づけようと、節分の豆とメッセージカードをお配りしました。

メッセージは、いち早く復興が進んでほしい願いや被災者の皆さんへのエールを、白馬中学校の生徒の皆さんに



書いて頂きました。

豆は「魔滅（まめ）」に通じ、無病息災を祈る意味があるそうです。

「これから始まる新しい一年が、不幸や災いの無い一年になりますように……」

裏面は、白馬村ボランティア連絡協議会の方々が書いた『鬼は外、福は内』の文字





地域とつながる第一歩！

まずはお近くの社会福祉協議会・ボランティアセンターへご相談ください。



市町村	名 称	電 話	市町村	名 称	電 話	市町村	名 称	電 話
長野市	長野市ボランティアセンター	026-227-3707	小海町	小海町社会福祉協議会	0267-92-4107	喬木村	喬木村社会福祉協議会	0265-33-4567
松本市	松本市ボランティアセンター	0263-25-7311	佐久穂町	佐久穂町ボランティアまちづくりセンター	0267-86-4273	豊丘村	豊丘村ボランティアセンター	0265-35-3327
上田市	上田ボランティア地域活動センター	0268-25-2629	川上村	川上村社会福祉協議会	0267-97-3522	大鹿村	大鹿村社会福祉協議会	0265-39-2865
上田市	丸子ボランティア地域活動センター	0268-43-2566	南牧村	南牧村ボランティアセンター	0267-96-2363	上松町	上松町社会福祉協議会	0264-52-3560
上田市	真田ボランティア地域活動センター	0268-72-2998	南相木村	南相木村社会福祉協議会	0267-78-1001	南木曽町	南木曽町ボランティアセンター	0573-75-5516
上田市	武石ボランティア地域活動センター	0268-85-2466	北相木村	北相木村社会福祉協議会	0267-77-2111	木曽町	木曽町社会福祉協議会	0264-26-1116
岡谷市	岡谷市ボランティアセンター	0266-24-2121	軽井沢町	軽井沢町社会福祉協議会ボランティアセンター	0267-45-8113	木祖村	木祖村ボランティアセンター	0264-36-3441
飯田市	飯田市ボランティアセンター	0265-53-3182	御代田町	御代田町ボランティアセンター	0267-32-1100	王滝村	王滝村社会福祉協議会	0264-48-2008
諏訪市	諏訪市ボランティア・市民活動センター	0266-54-7715	立科町	立科町町民活動センター	0267-56-1825	大桑村	大桑村ボランティアセンター	0264-55-3755
須坂市	須坂市福祉ボランティアセンター	026-248-5606	長和町	長和町社会福祉協議会	0268-88-3069	麻績村	麻績村社会福祉協議会	0263-67-3099
小諸市	小諸市市民活動・ボランティアサポートセンター	0267-26-0315	青木村	青木村社会福祉協議会	0268-49-2129	生坂村	生坂村福祉ボランティアセンター	0263-69-1122
伊那市	伊那市ボランティア・地域活動応援センター	0265-73-2541	下諏訪町	下諏訪町ボランティアセンター	0266-27-8886	山形村	山形村ボランティアセンター	0263-97-2102
駒ヶ根市	駒ヶ根市社会福祉協議会	0265-81-5900	富士見町	富士見町ボランティアセンター	0266-78-8986	朝日村	朝日村社会福祉協議会	0263-99-2340
中野市	中野市社会福祉協議会	0269-26-3111	原村	原村社会福祉協議会	0266-79-7228	筑北村	筑北村ボランティアセンター	0263-66-2506
大町市	大町市ボランティアセンター	0261-22-1501	辰野町	辰野町ボランティアセンター	0266-41-5558	池田町	いけだボランティアセンター	0261-62-9544
飯山市	飯山市市民活動支援センター	0269-62-2840	箕輪町	みのわ ふれ愛センター(箕輪町ボランティアセンター)	0265-70-1061	松川村	松川村ボランティアセンター	0261-62-9000
茅野市	茅野市ボランティア・市民活動センター	0266-73-4431	飯島町	飯島町ボランティアセンター	0265-86-5511	白馬村	白馬村ボランティアセンター	0261-72-7230
塩尻市	地域福祉・ボランティアセンター	0263-52-2795	南箕輪村	南箕輪村ボランティアセンター	0265-76-5522	小谷村	小谷村ボランティアセンター	0261-82-2430
佐久市	佐久ボランティアセンター	0267-64-2426	中川村	中川村社会福祉協議会	0265-88-3552	坂城町	坂城町ボランティアセンター	0268-82-2551
佐久市	臼田ボランティアセンター	0267-82-4332	宮田村	宮田村ボランティアセンター	0265-85-5010	小布施町	小布施町ボランティアセンター	026-242-6665
佐久市	浅科ボランティアセンター	0267-58-0383	松川町	松川町地域ボランティアセンター	0265-36-3778	高山村	高山村社会福祉協議会ボランティアセンター	026-242-1220
佐久市	望月ボランティアセンター	0267-51-1520	高森町	高森町ボランティアセンター	0265-34-3001	信濃町	信濃町ボランティア・まちづくりセンター	026-255-5926
千曲市	千曲市ボランティア・市民活動交流センター	026-276-2687	阿南町	阿南町ボランティアセンター	0260-22-3151	飯綱町	飯綱町ボランティアセンター	026-253-1001
東御市	東御市社会福祉協議会ボランティアセンター	0268-62-4455	阿智村	阿智村社会福祉協議会ボランティアセンター	0265-45-1234	小川村	小川村社会福祉協議会	026-269-2255
安曇野市	安曇野市社会福祉協議会ボランティアセンター	0263-72-1871	平谷村	平谷村社会福祉協議会	0265-48-2220	山ノ内町	つつみ住民活動センター	0269-33-2810
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 明科支所	0263-62-2429	根羽村	根羽村社会福祉協議会	0265-49-2288	木島平村	木島平村ボランティアセンター	0269-82-4888
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 堀金支所	0263-73-5288	下條村	下條村社会福祉協議会	0260-27-2858	野沢温泉村	野沢温泉村社会福祉協議会	0269-85-4347
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 穂高支所	0263-82-2940	売木村	売木村社会福祉協議会	0260-28-2004	栄 村	栄村ボランティアセンター	0269-87-3450
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 三郷支所	0263-77-8080	天龍村	天龍村社会福祉協議会	0260-32-2277	長野県	長野県社会福祉協議会地域福祉部ボランティア振興グループ	026-226-1882
安曇野市	安曇野市ボランティアセンター 豊科支所	0263-73-7143	泰阜村	泰阜村社会福祉協議会	0260-26-2162			

発行日：2016年3月31日

発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会 地域福祉部ボランティア振興グループ

〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130

イラスト：田之脇篤史

E-mail vcenter@nsyakyo.or.jp URL <http://www.nsyakyo.or.jp/>